

# Caux Round Table Japan

経済人コー円卓会議日本委員会  
(CRT日本委員会)

活動報告書2023  
(2023年1月1日～12月31日)



CAUX ROUND TABLE

## CRT日本委員会とは

経済人コー円卓会議（CRT：Caux Round Table）は、ビジネスを通じて社会をより自由かつ公正で透明なものとするを目的としたビジネスリーダーのグローバルネットワークです。1986年にスイスのコー（Caux）で創設され、アメリカ、ヨーロッパ、アジア、オセアニアの国々に拠点をもち活動しています。1994年に策定した「CRT 企業の行動指針」を基本に置き、互いに協力しながらCSR（企業の社会的責任）の浸透・普及に向けた取り組みを行っています。この行動指針は、日米欧の価値観を反映した「共生」「人間の尊厳」「ステークホルダーへの責任」の3つの理念に基づいており、文化や習慣、宗教が異なる日米欧の経済人達がともに作り上げた行動規範としては世界で初めてのものです。日本においては、1986年以降社団法人国際IC日本協会内に事務局を置き活動してきましたが、より積極的な活動をすべく2000年4月に「経済人コー円卓会議日本委員会（CRT日本委員会）」として組織化し、2006年にNPO法人となりました。CRT日本委員会は、「自らを正すことを第一とし、誰が正しいかではなく何が正しいか」という考えに基づき、日本の産業界におけるサステナビリティ/CSRの普及浸透と、企業における効果的な実践を、様々な取り組みを通じて支援しています

<CRT 企業の行動指針> \*CRT日本委員会ホームページ

<https://crt-japan.jp/about/guideline/>

## CRT日本委員会の理念 / ミッション

### 理念

企業と社会の持続的発展に寄与する。

### ミッション

私たちCRT日本委員会は、大局的かつ具体的な見地から社会と企業との動向を見据え、企業倫理への理解浸透とCSRの理念の広がりを目指して活動します。

また、個々の企業へ独自性と実践性にあふれた知見を最適な形で提供することを通じて、企業の活動を支援します。

# CRT日本委員会の活動方針

## 1. 世界と日本の架け橋 企業とNGOの架け橋

グローバルなサステナビリティ/CSR動向の理解なくして、また、ステークホルダーの声を聞くことなくして、効果的なサステナビリティ/CSRは望めません。

CRT日本委員会は、世界と日本の架け橋、企業とNGOの架け橋として、国内外のステークホルダーとの対話の場を創造しています。

## 2. Impact × Scalability

サステナビリティ/CSRの取り組みの効果を最大化するためには、ImpactとScalabilityが欠かせません。

CRT日本委員会は、様々な観点からImpact とScalabilityの最大化を支援し、企業価値の向上に寄与するサステナビリティ/CSRの実現を支援しています。

## 3. Think × Do tank = Sustainable Navigation

実践なくして効果的なサステナビリティ/CSRは実現しません。

CRT日本委員会は、最新のグローバルなサステナビリティ/CSR動向の調査に加え、協働プラットフォームや実践ツールの提供を通じ、アクションにつながる戦略の立案、また、その実践を支援しています。

# CRT日本委員会の事業活動

CRT日本委員会は、4つの領域の事業活動を相乗的に展開することにより、サステナビリティ/CSRの推進に貢献していきます。

**CSR活動事業：** 日本産業界におけるCSRの普及・浸透を推進する活動

**PSR活動事業：** 公正な社会の実現を担う人材を育成する活動

**セミナー事業：** 世界の情報を日本に取り入れ、日本の意見を世界に発信する活動

**国際協力活動事業：** グローバルなネットワークの構築と協働を推進する活動

# 事業活動報告

## 活動概況

### 国内外の動向

2011年に国連人権理事会において「ビジネスと人権に関する指導原則」（以下、指導原則）が承認されて以降、世界的にサプライチェーンを含めた人権に関する法制化が進み、2023年6月には欧州議会でCorporate Sustainability Due Diligence Directive のドラフト案が採択され、12月に欧州議会と欧州理事会が暫定合意に達しました。

また、情報開示の分野では、2023年6月に国際会計基準（IFRS）サステナビリティ開示基準の一般要件と気候関連、7月に欧州サステナビリティ報告基準（ESRS）草案改訂版が公表され、企業の透明性が開示法制の面からも求められるようになりました。

一方で、世界的に拡大を続けてきたESG投資残高が2022年に初めて減少し、米国におけるESGウォッシュ批判や政治的な反ESGの反動が主な原因とされていますが、企業にはサステナビリティ/CSRに関する表層的ではない継続的な行動がより一層求められているといえます。

日本においては、政府が「ビジネスと人権に関する行動計画」（2020年）や、「責任あるサプライチェーン等における人権尊重のためのガイドライン」（2022年）を策定し、日本企業の間でも指導原則に基づく人権尊重の取り組みを進めなければならないという意識が高まりました。

しかしながら、深刻な人権侵害はサプライチェーン、バリューチェーン上で発生するという国際的な人権認識に対して、日本ではまだ自社グループレベルの取り組みにとどまっている企業が多いのが実情といえます。

一方で、国内のサプライヤー工場における外国人技能実習生の労働搾取の問題や、海外における強制労働等の人権侵害に日本企業のサプライチェーンが関与している事例など、日本企業の人権対応には国際的に厳しい目が向けられています。

日本企業には、指導原則の本質に沿った、人権方針の策定～人権デューディリジェンスの実行～救済の仕組み構築（苦情処理メカニズム）の一連の人権尊重の取り組みが求められています。

## 2023年度の活動概況

CRT日本委員会は、ESGの中でも特に日本企業の対応が遅れているS=人権分野に関して、指導原則に則った人権尊重の取り組みを継続的に支援してきました。2023年度は前年に引き続き「ビジネスと人権」に関する企業ニーズが高く、外部の専門家や協力企業とも連携しながら、人権デューディリジェンスの実行支援を中心に活動しました。

日本企業の取り組みが、指導原則の本質に沿った国際的に認められた人権尊重のプロセスから乖離することがないように、グローバルな人権エキスパートと連携しながら、特に以下の点を重視して支援活動を進めてきました。

### 1) ライツホルダーとのエンゲージメント（直接対話と苦情処理メカニズム）

サプライチェーン上の人権課題への対応が不可欠であり、そのためにサプライチェーンの「見える化」が必要となります。人権デューディリジェンスにおいて、企業がサプライチェーン上の「ライツホルダー」である工場労働者や生産農家とダイレクト・コミュニケーション（直接対話）を行う機会を創ることにより、サプライチェーン上の問題を把握（＝見える化）する取り組みを行っています。

### 2) Duty of Care

気候変動や資源等の環境問題は、人々の生活環境や労働市場の変化を通じて人権問題を引き起こしており、企業が人権への影響を含めて環境問題に対応する必要性が世界的に指摘されています。人権デューディリジェンスで把握した環境・人権の課題を、企業の経営意思決定に反映することが重要であり、そのためのマネジメント評価やKPI策定などのガバナンス構築支援を行っています。

### 3) 情報開示

近年ESG投資家は公開情報に基づき企業を評価する傾向が強く、情報開示を行っていないと何も取り組んでいないと見做されてしまいます。達成した成果だけでなく進捗中の状況も含めて情報を開示していく透明性が企業に求められています。英国/豪州現代奴隷法声明文などの情報開示に関する法制対応や、人権報告書、ESGデータブック、ウェブサイト等による企業独自の情報開示支援など、国際的なサステナビリティ情報開示基準を見据えた対応を行っています。

## ▶事業活動報告

### CSR活動事業

日本産業界・企業へのサステナビリティ/CSRの普及・浸透を目的として、複数企業が参加する共通プラットフォームの提供と、個別企業の状況・ニーズに応じたコンサルティングサービスの両面から、国際基準に適合したCSRの推進を支援しています。

2023年度は、複数企業参加型共通プラットフォームの提供としては、日本で12年目となるステークホルダー・エンゲージメント・プログラム（SHE）を開催しました。

コンサルティング・サービスとしては、「ビジネスと人権」の分野では、指導原則に則った包括的な人権デューディリジェンスプロセスに基づき、ステークホルダー・ダイアログ、人権方針策定、人権デューディリジェンス、サプライチェーン・マネジメント等に関する企業支援を行いました。「ESG投資」の分野では、ESG情報開示に関する企業支援や、海外機関投資家とのダイアログを行いました。2023年度は、特に「ビジネスと人権」に関する企業支援が増加し、協力関係にあるコンサルティング会社等とも連携し体制を整えながら、一貫した企業支援を実施しました。

### 2023年度の主な活動実績

#### ビジネスと人権関連

- ・ステークホルダー・エンゲージメント・プログラム
- ・人権デューディリジェンス実行支援
- ・外国人労働者の採用・雇用に関する支援
- ・ビジネスと人権に関するe-ラーニング制作
- ・ビジネスと人権に関するアドバイザリー業務
- ・サプライチェーン労働者情報管理/苦情受付システムの開発・運用
- ・サプライチェーン・マネジメント（責任ある調達）支援

#### ESG投資関連

- ・ESG情報開示支援  
（ESGデータブック作成、ESG情報開示レビュー、報告書作成支援等）
- ・ESG投資調査対応支援
- ・海外ESG投資家とのダイアログ

## ▶事業活動報告

### PSR活動事業

2023年度は、ビジネスと人権に関する企業支援等のCSR活動事業にリソースを優先する必要があることから、PSR活動事業は休止しました。ただし、別途セミナーおよびステークホルダーエンゲージメントプログラム、ビジネスと人権に関する国際会議の中で、CRTの理念や「企業行動指針」を軸とした経営者および人材の重要性について講演しました。

### セミナー事業

CRT日本委員会が持つグローバルなネットワークを活かし、世界の情報を日本に取り入れ、日本の意見を世界に発信することを目的に、国際会議やセミナーを開催しています。2023年度は、12回目となる「ビジネスと人権に関する国際会議」を開催しました。毎年、世界の人権に関する専門家・NGOを日本に一同に集めて議論するこの国際会議は、最先端の情報を共有出来る場として発展、定着しています。

### 2023年度の主な活動実績

ビジネスと人権に関する国際会議（10月、東京）

セミナー開催（随時 計5回、オンライン形式）



人権デューデリジェンス実行支援－生産農家とのダイアログ | CSR活動事業  
(インドネシア)

## ▶事業活動報告

### 国際協力活動事業

サステナビリティを巡るグローバルなトレンドに関する最先端の情報収集と、国際的なネットワークの形成および協働の促進を目的として、国際会議への参加やイニシアチブへの参画を積極的に行っています。

2023年度は前年度に引き続き、ESG投資のベンチマーク開発を行っているルール・メーカーとのネットワークを積極的に構築しました。

#### 2023年度の主な活動実績

UN Forum on Business and Human Rightsへの参加（11月、スイスジュネーブ）

NGOと企業の連携フォーラムへの参画（主催：JANIC 国際協力NGOセンター）

SDGs市民社会ネットワークへの参画

ILO活動推進日本協議会への参画

WBA(World Benchmarking Alliance)との連携によるESG投資ベンチマーク開発への対応



ビジネスと人権に関する国際会議－人権専門家とのダイアログ | セミナー事業  
(東京)



# 会計報告

## 活動計算書

単位：円

科目	2023年度	2022年度
	(2023年1月1日~12月31日)	(2022年1月1日~12月31日)
<b>I 経常収益</b>	<b>331,850,246</b>	<b>198,321,123</b>
1 受取会費	1,100,000	1,450,000
2 事業収益	330,749,517	196,672,823
(1) CSR普及浸透事業収益	330,749,517	196,672,823
CSR活動収益	322,499,517	186,772,823
PSR活動収益	0	3,300,000
セミナー収益	8,250,000	6,600,000
(2) 国際協力活動事業収益	0	0
3 その他収益	729	198,300
<b>II 経常費用</b>	<b>253,246,226</b>	<b>182,818,477</b>
1 事業費	186,876,639	135,554,272
(1) 人件費	94,394,170	66,345,002
(2) その他経費	92,482,469	69,209,270
2 管理費	66,369,587	47,264,205
(1) 人件費	41,319,908	28,000,213
(2) その他経費	25,049,679	19,263,992
当期経常増減額	78,604,020	15,502,646
<b>III 経常外収益</b>	<b>0</b>	<b>0</b>
<b>IV 経常外費用</b>	<b>0</b>	<b>0</b>
税引前当期正味財産増減額	78,604,020	15,502,646
法人税、住民税及び事業税	4,218,000	2,526,900
当期正味財産増減額	74,386,020	12,975,746
前期繰越正味財産額	61,035,633	48,059,887
次期繰越正味財産額	135,421,653	61,035,633

## 貸借対照表

科目	2023年度	2022年度
	(2023年12月31日現在)	(2022年12月31日現在)
<b>I 資産の部</b>		
1 流動資産	139,137,792	62,011,603
現金預金	110,295,279	51,758,511
未収金	23,249,653	10,253,092
前払金	5,592,860	0
2 固定資産	1,030,001	1,030,001
有形固定資産	1	1
什器備品	1	1
無形固定資産	0	0
投資その他の資産	1,030,000	1,030,000
敷金・保証金	1,030,000	1,030,000
<b>資産合計</b>	<b>140,167,793</b>	<b>63,041,604</b>
<b>II 負債の部</b>		
1 流動負債	4,746,140	2,005,971
未払金	55,000	0
前受金	1,363,980	0
預り金	3,327,160	2,005,971
2 固定負債	0	0
<b>負債合計</b>	<b>4,746,140</b>	<b>2,005,971</b>
<b>III 正味財産の部</b>		
前期繰越正味財産額	61,035,633	48,059,887
当期正味財産増減額	74,386,020	12,975,746
<b>正味財産合計</b>	<b>135,421,653</b>	<b>61,035,633</b>
<b>負債及び正味財産合計</b>	<b>140,167,793</b>	<b>63,041,604</b>

## 組織概要

### 役員（2024年4月1日現在）

#### 会長

矢野 弘典 中日本高速道路株式会社 元会長

#### 副会長

金子 保久 パナソニック株式会社 客員

#### 理事

石田 寛 業務執行理事 兼 事務局長

近藤 清久 中日本高速道路株式会社 取締役常務執行役員 経営企画本部長

新谷 哲之介 東京海上日動火災保険株式会社  
海上業務部 シニアエキスパート

筒井 裕子 日本郵船株式会社 執行役員 ESG経営推進グループ担当

仲本 直史 花王株式会社 常務執行役員 購買部門統括

宮田 千夏子 ANAホールディングス株式会社 上席執行役員  
グループCSO（Chief Sustainability Officer）  
サステナビリティ推進部長

#### 監事

三宅 博人 公認会計士

#### 名誉会長

橋本 徹 一般財団法人日本経済研究所 理事

## Caux Round Table (CRT)の歴史

『経済人コー円卓会議』は通商問題に端を発して日米欧の経済人達によって設立されました。その背景としては、企業が社会の信頼を獲得し建設的な貢献を果たすとともに、様々な摩擦を解決するためには、まず企業自らが行動を律することが基本である、との認識で一致したことが挙げられます。日本では、2000年4月に経済人コー円卓会議日本委員会（CRT-Japan：CRT日本委員会）として新たに組織化され、現在にいたっています。

### 1986

第1回会議がスイス・コーで開催される。

フレデリック・フィリップス（フィリップス社元社長）とオリビエ・ジスカールデスタン（ヨーロッパ大学院元副理事長）により創設。以降、競争のルール作りや企業の社会的責任を明らかにしようとの議論が続く。

## History of Caux Round Table

The Caux Round Table was initially founded by business leaders of Europe, the United States of America and Japan to address mounting trade tensions. The business leaders at the time reached an understanding that to solve various trade tensions, business need to review oneself so that business can win trust from society and contribute constructively. In April 2000, Caux Round Table -Japan was established.

The first conference was held in Caux, Switzerland. The Caux Round Table was founded in 1986 by Frederick Phillips, former President of Philips Electronics and Olivier Giscard d'Estaing, former Vice-Chairman of INSEAD, as a means of reducing escalating trade tensions. Since then, the Caux Round Table has been discussing key issues such as developing rules for competition, Corporate Social Responsibility.

### 1992

第7回会議

「公正な競争と共存共栄との両立をはかる『共生』の理念」がキャノンの故賀来会長をはじめとする日本側参加者より提案される。その後、公正な企業活動の行動指針をステークホルダーズ（企業を取り巻く利害関係者）ごとにまとめた『ミネソタ原則』が米国側から発表され、続いてヨーロッパ側からも企業に従事する個人の尊厳を強調する『人間の尊厳』の精神が提案される。

The 7th Caux Round Table

Ryuzaburo Kaku, the former President of Canon Inc. led the Japanese delegation and suggested the principle of “Kyosei” as a key principle for business. “Kyosei” means “Living and working together for the common good.” The American delegation suggested “Minnesota Principles for ethical and socially responsible business” and the European Delegation suggested “Human Dignity” as a key principle

### 1994

第9回会議

日米欧の価値を盛り込んだ『経済人コー円卓会議・企業の行動指針』を採択。

The 9th Caux Round Table Conference

The CRT Principles for Business incorporating principles from Japan, the United States and Europe was formally launched.

特定非営利活動法人

経済人コー円卓会議日本委員会

〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町29-33

渋谷三信マンション505号室

Tel:03-5728-6365

<https://www.crt-japan.jp/>

Caux Round Table Japan

Shibuya Sanshin Mansion 505

29-33, Sakuragaoka-cho, Shibuya-ku,

Tokyo 150-0031, Japan

TEL: +81-3-5728-6365

CAUX ROUND TABLE